整理番号㊸-1

マンガを日常に。本棚からつくる繋がり。

昨今、「マンガ離れ」という言葉が聞かれるようになりました。手軽なネットサービスの普及や、学業などで忙しい若者が増えたことで、本だけでなくマンガに触れる機会も少しずつ減っています。時代の変化とはいえ、少しさみしく感じます。

そこで提案するのが「マンガを起点とした駅前づくり」です。藤子不二雄Ⓐ先生のふるさとである氷見。その駅前に、氷見ゆかりのマンガを中心に本や音楽、アートなど様々な文化に触れられる、若者が集い、新たな交流が生まれるエキマエ空間を計画します。

「氷見」が見える玄関口。

氷見駅に降り立ったとき、そこから何が見えるでしょうか。今の駅前には黒瓦の屋根はいくつか見えますが、富山湾や立山連峰、魚屋や氷見うどんなど、「氷見らしさ」を感じさせるものは見えません。旅行客が駅に着いて最初に感じたいのは、「ああ、氷見に来たなあ」という実感ではないでしょうか。そこに人の賑わいや楽しげな風景があれば、まちへの期待はさらに高まります。そんな駅前を目指して、「氷見が見える玄関口」を提案します。

待つ。歩く。乗る。選ぶ楽しさを作る。

交通の拠点である駅では「その先の道を選択できること」が必要だと考えます。自由に交通機関を選ぶことも、歩いて目的地へ向かうこともできる。
あるいは、そこに留まって過ごすこともできる。
それらすべての選択肢が魅力的になったなら、
駅は「これから」を期待できる場所に
なっていくのではないでしょうか。

水やりを日常に。自治する駅前。

氷見の駅前に日常的な賑わいを生み出すには、どうしたらよいのでしょうか。その答えは、「住民が自ら駅前をつくっていくこと」にあると考えます。週に一度、駅前の草木に水をあげる。たったそれだけでも、まちのみんなが関わり始めれば、少しずつ人が集まり、自然と駅前に賑わいが生まれていきます。

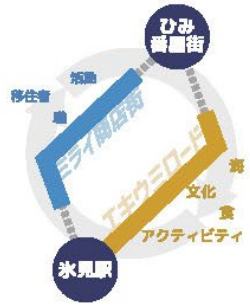


マンガを起点にした 自分たちがつくる ヒミの賑わい。

整理番号㊸-2



ビ 二つのテーマを持った「通り」



氷見駅の周辺に異なる２つのテーマを持った道を作ります。

ひとつは氷見駅から南大町交差点をつなぐ道につくる「エキウミロード」。氷見の名物が食べられる飲食店や海のアクティビティ拠点、モビリティステーションなど次の体験へつながる機能を配置することで、番屋街までの道のりを「歩いて楽しい道」にします。

ふたつめはまりんろーど本町につくる「ミライ商店街」。低未利用地や空き家を活用し、県外から手に職を持った移住者や新たな活動を始めるひとを誘致する。担い手の不足が進む商店街に、これからの氷見に必要な人材や仕事が集まる事で、新たな賑わいを生み出すとともに、住民とっても新しい挑戦や活動の場がつくられます。

ビ ヒミマチ会議 - 自分ゴトにするまちづくり -



氷見では市民がまちの未来を自ら考える「ヒミマチ定例会議」を立ち上げます。会議では、「これからの氷見にどのような店や仕事、サービスが必要か」を住民同士で話し合い、商店街や駅前に迎えたい事業者の業種を地域側から逆指名します。空き店舗を埋めることを目的とするのではなく、暮らしに必要な機能や、訪れる人を惹きつける魅力を地域自身が選び、事業者とともに育てていきます。まちづくりを行政や事業者だけに任せず、一人ひとりが「自分ゴト」として関わることで、住民が誇りと愛着を持ち、長く支え続けられる氷見のまちを目指します。

ビ ヒミマチ園芸部 - 自治するまちづくり -



一週間に１回の水やり。そんな小さなことからまちづくりを始めます。

氷見駅周辺の街角や休憩スペースに「植栽帯」を設け、それらの手入れを地域住民が参加する「ヒミマチ園芸部」が担います。自分たちの手で街の景色を育てる。その小さな関わりが、「この場所をもっとこうしたい」という思いを生み、住民がまちづくりを自分ごととして考えるきっかけになります。

さらに、活動参加者には駅周辺の店舗や施設で使えるクーポンを配布。まちを育てる活動が駅前を訪れるきっかけとなり、利用や交流へとつながることで、地域の中に小さな賑わいの循環を生み出します。

整理番号㊸-3



3車分離による円滑化・広場空間の創出

氷見駅前のロータリーを、バス・タクシー・一般車送迎の三つの動線に整理し、車両が交錯しない安全で円滑な交通環境をつくります。同時に、ロータリーの中心を車のためだけの空間から、人が集い、待ち、憩う広場へ転換。交通の結節点に日常の居場所を重ねることで、移動するだけではない、滞在したくなる氷見の玄関口をつくります。



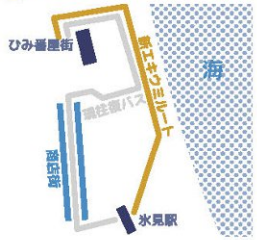
まちの本棚 - 読んで学ぶ駅前ひろば -

広場には、氷見のマンガや郷土資料を収めた「まちの本棚」を設置します。若者や観光客が気軽に氷見の文化に触れ、自然と人が集まり、滞在が生まれる仕掛けです。周囲にはカフェやショップを配置し、ヒミマチ園芸部の活動参加者には利用券を配布。地域活動と駅前施設の利用をつなぐことで、日常の賑わいを持続させます。電車やバスを待つ時間さえも、氷見を知り、楽しむ時間へと変えていきます。



画像引用：Library Road Trip,Garden Library for Refugees and Migrant Workers, Tel Aviv, Israel,https://libraryroadtrip.com/2019/02/03/jerusalem-a-tale-of-two-countries-and-a-trip-up-north/garden-library-for-refugees-and-migrant-workers-tel-aviv-israel-2/

海沿いを通る番屋街行きルート



従来のひみ番屋街行きバスは商店街を経由していましたが、商店街には他路線も充実しています。そこで、駅からエキウミロードを抜け、賑わいのある通りと海沿いを結ぶ新たなルートへ再編します。路線距離と回遊時間を短縮しながら、車窓から氷見らしい景色を楽しめる、移動そのものが目的になる「乗りたくなるバス」をつくります。

ヒミエキ文庫 - マンガ -PFI による持続化 -



全国で活用が進む「パーク -PFI」。飲食店や売店などの収益の一部を、公園の質や利便性の向上に還元する制度です。氷見駅前では、この仕組みを「マンガ」に応用します。駅の向かいに設ける「ヒミエキ文庫」と、マンガ本棚を備えた「ヒミエキ広場」。二つの場所の運営・維持管理を民間事業者に一任することで、持続可能な賑わいづくりを目指します。

小さく始めて繋げていく -15 年ロードマップ -

家具を駅前に置いて行う社会実験やワークショップ、空き家を使ったチャレンジショップ、地域住民向けのイベントなど小さなコトから始めていく。

JR 移管

直通化に合わせて駅前を整備。まずは住民の賑わいを創る。

エキマエ完成

※鉄道事業再構築実施計画に記載の計画期間より想定
直通化完了

駅完成

駅前の住民の賑わいを作った後は、その賑わいを少しずつ広げていく。駅前を自治する体験を元に自分事として街を作っていく。

エキウミロード完成

賑わいを伝播させた後は、それらを種に将来の街の発展に繋げていく。

	2026	2027	2028	2029	2030	2031	2032	2033	2034	2035	2036	2037	2038	2039	2040	2041	2042....
	フェーズ 01　まちを知る・ひとから始める						フェーズ 02　駅と駅前の整理・外の人を呼び込む					フェーズ 03　海・番屋街までの道をつなぐ					
交通 公共交通再編			路線バス・コミュニティバス タイムテーブル・ルート整理検討					氷見駅改修工事								氷見駅 - 番屋街間 大南町経由ルート稼働開始	
空間 ハード整備		駅前に小さな本棚やベンチを置いて行う社会実験		駅前ワークショップ 広場の計画・設計		駅前広場・ロータリー ヒミエキ文庫工事		氷見駅と海をつなぐ道 実験イベント開催		氷見駅 - 南大町交差点間 舗装工事・ストリートファニチャ設置		業者決定 施設・店舗整備				オフィス商店街 逆指名募集	
仕組み ソフト・運営	ヒミマチ会議開始 氷見駅にどんなお店・場所があってほしいか		駅前チャレンジショップ マンガパーク -PFI 実験		駅前ショップ逆指名募集・事業者審査会		駅前ショップ開業 マンガパーク -PFI 開始		ヒミマチ会議 氷見のまちにどんなお店・場所があってほしいか		逆指名事業者募集 チャレンジショップ			エキウミロード 活性化イベント開催			
市民参加 自治・行事			ワークショップへの参加・アンケート				民間イベント開催 氷見エキマエ園芸部発足				氷見エキマエ園芸部活動・イベント参加・日常利用						

小さく始めて、15 年かけて街の顔にする。育ち続ける駅前をつくる。